

『ヴェローナの二紳士』における共通の意味とその変化
ーヴァレンティンとプロテュースの共通性ー

はじめに

恋と友情の確執を描いた作品は、古今東西枚挙に暇がない。同じ異性を同じ人間が愛してしまう、というのはそれだけ頻繁に起こりうる事なのだろう。我々でさえそのような経験をしたことがある人は多いのではないだろうか。恋と友情、優先させるべきはどちらなのだろうか。

ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564—1616)の『ヴェローナの二紳士』(*The Two Gentlemen of Verona*, 1598)¹はまさに恋と友情の葛藤および裏切りを主題とした作品である。タイトルに「二紳士」という言葉が使われているように、物語はヴァレンティン(Valentine)とプロテュース(Proteus)を中心に展開する。劇の最初にヴァレンティンは「説得するのはよしてくれ、親愛なるプロテュース」(“Cease to persuade, my loving Proteus”)(1. 1. 1)と旅立ちを行う自分に対しての引き留めをやめるようにプロテュースに述べる。それに対してのプロテュースの言葉を引用してみよう。

Proteus Wilt thou be gone? Sweet Valentine, adieu.
 Think on thy Proteus when thou haply seest
 Some rare noteworthy object in thy travel.
 Wish me partaker in thy happiness
 When thou dost meet good hap; and in thy danger—
 If ever danger do environ thee—
 Command thy grievance to my holy prayers;
 For I will be thy beadsman, Valentine. (1. 1. 11-8)

プロテュース 行くのか、親愛なるヴァレンティン。さようなら。
 何か偶然に見つけたなら、君のプロテュースを思ってくれ。
 旅の途中で见つける珍しい物をな。
 君の幸福を私も経験できるように祈ってくれ。
 何か良い事に君が出会ったなら。そして危険については
 君が襲われたなら、

私の神聖な祈りで君の苦悩が助け出されると思ってくれ。

なぜなら私は君のために祈る人間だから、ヴァレンタイン。

二人のこの様子で感じられるのは、別れでありながらも心は一緒であるという一体感ではないだろうか。劇の最初にヴァレンタインとプロテウスという別個の存在ではあるが、一つの存在、あるいは連帯感というのが示されている。この個別性と同一性が作品の中で重要な考え方のように思える。

トマス・クレイトン(Thomas Clayton)は、ヴァレンタインとプロテウスの関係について、心理学の考え方を引き合いに出し「この『第二の自我』の公式の背景には、昔からありよく知られた『友人は別の自己』という考え方がある」(“Behind the “alter-ego formula” lies the ancient and familiar notion that “the friend is another self””)(18)と述べ、同一性に注目している。そしてハリー・ケイシアン(Harry Keyishian)は劇の特徴について「『ヴェローナの二紳士』はシェイクスピアの初期作品で比較的初歩的な技術が用いられているが、主に「二人だけの対話」あるいは「一対の対話」に頼っている」(“*Two Gentlemen of Verona*, as an early work of Shakespeare’s and relatively primitive in technique, relies heavily on “duologues” or “duets”)(6)と台詞の特徴から二人の近さと同一性を示唆している。またピーター・ランデンボーム(Peter Lindenbaum)は、作品が進行する中での二人の成長という点に注目して「作品の過程で教育を受けるのはプロテウスだけでなく、ヴァレンタインもそうであり、ヴァレンタインを通して作品の社会全体が教育を受けるのだ」(“it is not only Proteus who is to be educated in the course of the play, but also Valentine, and through him the play’s society as a whole”)(232)とし、やはり二人の共通性を述べている。ヴァレンタインとプロテウスの同一性と共通性は批評家たちの意見からも重要な要素であるというのがわかるであろう。

本稿では別個の存在でありながらも同一性を示すヴァレンタインとプロテウスの存在の意味を考えてみたいと思う。劇の発端で示された二人の同一性、共通性、または作品タイトルで示される『ヴェローナの二紳士』という二つの存在をもって一つとされる、二人の連帯感はどのような結果を生じさせるのだろうか、という事を考察してみる事にする²。

1. ヴァレンタインの不完全性

タイトルの二紳士の片方をなしているのがヴァレンタインであり、作品中で重要な役割を果たしているのは当然である。まず最初にヴァレンタインについて読者が感じる事は、彼の知への強い欲求ではないだろうか。この劇が始まるのは、ヴァレンタインの旅立ちの決意であるが、その理由は自分の見聞をもっと広げたいという彼の意志である。「家に閉じこもっている若者は、家の中での知識しか持たない」(“Home-keeping youth have ever homely wits”)(1. 1. 2)と自分自身の境遇に満足せず、旅という方法で、自分が新たな知恵を獲得し成長する事を求めている。知への欲求を示しているヴァレンタインについて、まず読者は好意的な印象を持つのではないだろうか。

しかし、知を求めるヴァレンタインであるが、彼は鋭い知性を持った登場人物とは到底考えられない。自分の恋人シルヴィア(Silvia)との手紙についての会話を考えてみれば一目瞭然である。恋文をシルヴィアに送ったヴァレンタイン、そしてそれを嬉しく思いつつも率直にそれを表現しないシルヴィアとのやりとりを引用してみる。

Silvia Ay, ay; you writ them, sir, at my request,
 But I will none of them; they are for you.
 I would have had them writ more movingly.
Valentine Please you, I'll write your ladyship another.
Silvia And when it's writ, for my sake read it over,
 And if it please you, so; if not, why, so.
Valentine If it please me, madam, what then?
Silvia Why, if it please you, take it for your labour.
 And so good morrow, servant. (2. 1. 116-24)

シルヴィア そう、そう、私がお願いしてあなたがお書きになりました。
 でも、私には必要ではなく、あなたのものです。
 もっと感動的に書いてほしいものですわ。
ヴァレンタイン お気に召すよう、もう一通書きましょう。
シルヴィア 書いたら私のために読んでくださいね。

もし、あなたが満足なら結構。そうでなくても構いません。

ヴァレンタイン もし私が満足ならどうなのですか。

シルヴィア そう、満足ならその努力に報いて手紙を取っておいて下さい。

では、ごきげんよう、私の騎士。

私に手紙を書いてくださいというシルヴィアの求愛は、ヴァレンタインには理解されない。続く自分の召使スピード(Speed)に対して「彼女は私に何も、怒りの言葉以外何もくれなかった」(“ She gave me none, except an angry word ”)(2. 1. 146)という言葉がそれを証明している。召使のスピードはこのやり取りを理解して「なんと素敵な工夫だ。こんな事って聞いたことあるだろうか」(“ O excellent device, was there ever heard a better?— ”)(2. 1. 129)とむしろ主人よりも機知の豊かさを示しているのである³。知に対しての欲求を示していたはずのヴァレンタインは機知に富む青年とは決して言えないのではないだろうか。

『ヴェローナの二紳士』中の恋のやり取りについてマーガレット・モウレー(Margaret Maurer)は「恋人たちが互いに会おうほとんどの機会において、何かを与えはするが何らかの方法で、返されたり戻ってきてしまう。結果的に愛の印としての仕草の意味は、誤解を含んでしまうのである」(“ In most encounters that the lovers have with one another, something is offered only to be in some way returned or taken back, with the result that the meaning of the gesture as a sign of love must include its being misapprehended ”)(415)と述べているが、まさに理解されないシルヴィアの求愛ではないだろうか。ヴァレンタインに鋭い知性と機知があれば、この手紙についての恋の機微は理解されたはずである。劇の発端で知を求めるヴァレンタインは、実は知性と機知に欠けるという矛盾を示している登場人物である。知を求めるという好印象にもいささかの滑稽さを感じてしまうのではないだろうか。完全とは言えない登場人物なのだ。

愛に関して知性の欠如が見いだせるヴァレンタインであるが、知性だけでなく情についても滑稽さを感じられる。シルヴィアはヴァレンタインに対して忠実な恋人であり、プロローグの口説きに対して「天もご存じのように、私はヴァレンタインを愛している/あの人の命は私の魂のように大切に思っている」(“ O heaven be judge how I love Valentine, / Whose life's as tender to me as my soul ”)(5. 4. 36-7)とはっきり拒絶

している。ヴァレンティンを無二の恋人として考えているのである。プロテュースは自身の愛が叶わない事を知ると、森の中で強姦によりシルヴィアを無理やり手に入れようとする。寸でのところで居合わせたヴァレンティンによりシルヴィアは救われる事になる。「信義もなければ愛もない/今の世の中では友人なんてこんなものか」(“ that’s without faith or love, / For such is a friend now ”)(5. 4. 62-3)と怒りを表すヴァレンティンにより反省をうながされたプロテュースであるが、その反省に対してのヴァレンティンの対応が滑稽極まりないのである。

Valentine Then I am paid,
 And once again I do receive thee honest.
 Who by repentance is not satisfied
 Is nor of heaven nor earth, for these are pleased;
 By penitence th’Eternal’s wrath’s appeased.
 And that my love may appear plain and free,
 All that was mine in Silvia I give thee. (5. 4. 77-83)

ヴァレンティン それなら私は報われた。
 もう一度君を誠実な友人として受け入れよう。
 後悔していながらも許されない者は、
 天上の者でも地上の者でもない。なぜなら天も地も許すから。
 永遠の神の怒りも後悔により静められる。
 私の愛が公明で自由であることを示すために、
 シルヴィアにおける私の愛の立場を君に与えよう。

ヴァレンティンの急激な変化が分かるのではないだろうか。友人を許す証拠として恋人をプロテュースに明け渡すというのは、誠実な愛をヴァレンティンに捧げるシルヴィアへの裏切りに他ならない。友情の概念が現代の我々とは違っている事を考えても、これは滑稽なのである。ウィリアム・ロスキー(William Rossky)は『『ヴェローナの二紳士』の主なパターンにはしかしながら、滑稽さが残る」(“ The major pattern of *The Two Gentlemen of Verona* remains, however, burlesque ”)(218)としながら、ヴ

ヴァレンタインのこの行動について「この観点から言えば、ヴァレンタインの間違った規範への執着は、エリザベス朝時代の基準においても、いかに馬鹿げているかを指摘することは重要である」(“ In this context, it is important to point out how ridiculous Valentine’s adherence to a false code is, even in Elizabethan terms ”)(219)とこの滑稽さを裏付けている。

ジャスティン・B・ホプキンス(Justin B. Hopkins)は引用部分の最後の行、“ All that was mine in Silvia I give thee ”を「ヴァレンタインは自分のプロテュースに対しての愛を返そうとする意志をはっきりさせているのであり、シルヴィアをプロテュースに明け渡そうとはしていない」(“ Valentine made it clear that he intended to return his own love to Proteus, not to turn over Silvia to him ”)(733)と上に述べた考え方に反対している。しかし、この台詞の直後にやり取りを聞いていた男装の変装をしていたプロテュースの恋人ジュリア(Julia)が「ああ、不幸な私」(“ O me unhappy ”)(5. 4. 84)と気絶していることを考えるのなら、ホプキンスの解釈は間違いであり、ヴァレンタインによるシルヴィアへの誠実な愛の裏切りの台詞と考えるのが適当ではないだろうか。愛という情に対してもヴァレンタインは不完全さを示している。滑稽さが感じられるのである。

知性に対して強い欲求があるにもかかわらず、それが欠如しているヴァレンタイン。そして恋人の誠実な愛に対しても裏切りとも考えられる滑稽な態度を示すヴァレンタイン。彼は矛盾と不誠実さを含んだ、不完全な登場人物と考えられるのである。

2. プロテュースの二面性と矛盾

ヴァレンタインの友人であるプロテュースは、友人を裏切る人物として通常望ましい評価は与えられない。たしかに自分の欲望のために恋する女を無理やり犯して手に入れようとするなど、自分勝手な男として考えられるのが普通であろう。しかし、ヴァレンタイン同様にプロテュースも多面性を有した人物であり、完全な悪者と考えてしまうのは危険な読みではないだろうか。ヴァレンタインが不完全性を示すように、プロテュースも不完全性を示しつつ、そこには一定の評価が与えられるのである。友人の裏切りに関しても、ハワード・C・コール(Howard C. Cole)の「中世のモラリストたちの特別な美德に対する強調はしばしば、友情を馬鹿げた程度まで推し進める傾

向があった」(“ the medieval moralist’s tendency to highlight a particular virtue occasionally pushed friendship to absurd limits ”)(211)という意見を考慮に入れるならば⁴、弁解の余地もプロテュースに与えられるのではないだろうか。友情を軽視しても、必ずしも間違いではないという場合がある。以下に挙げる箇所は、それが分かる場面である。ヴァレンティンがシルヴィアをさらっていく事を告げ口するプロテュースの言葉である。

Proteus I know you have determined to bestow her
On Thurio, whom your gentle daughter hates,
And should she thus be stol’n away from you
It would be much vexation to your age.
Thus, for my duty’s sake, I rather chose
To cross my friend in his intended drift
Than my concealing it heap on your head
A pack of sorrows which would press you down,
Being unprevented, to your timeless grace. (3. 1. 13—21)

プロテュース 私は姫を大公がお与えになろうとしているのを知っています。
優しい姫が嫌っているシューリオにです。
もし、万一姫が大公から盗まれたなら、
大公の年齢には大変な苦痛になるでしょう。
したがって私は義務のために、こう決めたのです。
友人の計画を未然に防ごうという事を。
これを隠して大公の心に
大きな悲しみが降り下りてきて、
容赦なく永遠の墓へと押し込んでしまうよりも。

ここに描かれているのは、プロテュース自身も恋をするシルヴィアがヴァレンティンにより連れ去られてしまう事を恐れての密告であり、友人の裏切りである。しかし、大公にとってはシルヴィアは娘であり、プロテュースにとっては大公は自分が

仕える主人である。シルヴィアへの恋心という私の感情を抜きにして、公としてとったプロテュースのこの密告は必ずしも間違いとは言えないであろう。実際にこれを聞いた大公は、プロテュースに感謝している。この密告の根本にあったのは、シルヴィアへの恋心であり、そして友人ヴァレンティンへの嫉妬であるかもしれないが、この行動の意味は、人に仕える人間としては、あながち間違いとは言えない。そして先ほど引用したコールの意見でもこの恋心による行動の起こりやすさを中世の文学を挙げて説明している。つまり「女性に対する愛に対して友人に対する愛を問題にする物語は、ボッカチオとエリオットの貢献としてよく知られた伝統であるが、全て心理学的に真実性がある事を目指している」(“ the tales which test love for friend against love for lady, the tradition which defines the better known contributions of Boccaccio and Elyot, all aim at psychological credibility ”)(211)として、裏切りを妥当なものとはしないまでも、恋心に友情よりも大きな意味を持たせても、異常ではないという事を示唆している。そこへ公の義務という意味が加わったなら、プロテュースのこの行動は、一定の評価を与えても間違いとは言えないであろう。

プロテュースが自分の恋心を独白によって吐露している場面は第4幕第2場のはじめにおいてである。友情よりも恋心に大きな意味を持たせているプロテュースであるが、そこには彼の一抹の良心の呵責が含まれているように思える⁵。ここではその場面を引用してみたいと思う。

Proteus Already have I been false to Valentine,
 And now I must be as unjust to Thurio.
 Under the color of commending him
 I have access my own love to prefer.
 But Silvia is too fair, too true, too holy,
 To be corrupted with my worthless gifts.
 When I protect true loyalty to her
 She twits me with my falsehood to my friend.
 When to her beauty I commend my vows
 She bids me think how I have been forsworn
 In breaking faith with Julia, whom I love; . . . (4. 2. 1-11)

プロテュース 私はすでにヴァレンティンを裏切った。
そして今、シュリーオにも不正を働かなければならない。
あの男を推薦するという口実で
自分の恋を成し遂げようとしているのだ。
しかし、シルヴィアはあまりにも美しく、正しく、神聖なので
私のつまらない贈り物で汚されはしない。
彼女に誠意を見せたなら、
私が友人に対していかに不正であったかをなじる。
彼女の美しさに誓いを立てたなら、
自分がいかに誓いを破ったかを考えなさいと命じるのだ。
私がかつて愛したジュリアとの誓いの破棄についてだ……

ここで示されているのはプロテュースによるシルヴィアへの恋心であるが、友人ヴァレンティンに対してとった行動は裏切りでありそして不正であるという言葉で、罪の意識を表している。恋心に含まれる少しではあるが、友人への良心が感じられる。もし全く友人への配慮に欠けているのなら、自分のとった行動に対して裏切りや不正という言葉は使わないのではないだろうか。プロテュースの意識の二面性が感じられる。

この意識の二面性を発展させ、エリザベス・リブラン(Elizabeth Rivlin)は仕える人間という観点で興味深い意見を述べている。彼女によると仕える人間とは、家庭における奉公人、賃金をもらい命令に従い義務を果たす人間、そして恋人に対して愛をささげる人間の3種類であり(107-8)⁶、「幅広いサービスの項目下におけるこれらの役割の分類は、エリザベス朝社会での仕える役割が偏在し、代替可能な性格であることを証明するものであり、結果的に仕える人間を固定した、そして融通性のない言葉で定義することの難しさを表すものである」(“ The classification of these roles under the broad rubric of service testifies to the ubiquity and fungibility of service roles in Elizabethan society, and consequently the difficulty of defining the servant in fixed, nonnegotiable terms ”)(108)としている。つまり恋人に対して愛を捧げる人間としての仕える人間も流動性を表すという事をリブランは示している。プロテュースの現在の恋人ジュリアからシルヴィアへの心変わりも流動性を考えるならば、それほど不思議

議ではないことが、仕える人間の観点からも明らかである。

ヴァレンタインは自分の恋人を友人に譲ろうとする不誠実で、愛に対しての裏切りとも考えられる矛盾を示した。そしてプロテュースも自分の恋人からシルヴィアへの心変わりという裏切りや友人に対しての裏切りを行いつつ、公の義務を果たすことや良心の呵責を示すことで、愛に対して複雑な状況を示している。愛に対してヴァレンタイン、プロテュース共に単純ではない矛盾を含んだ登場人物なのである。プロテュースがヴァレンタインと似たような特徴を有していると考えても不思議ではない。公の義務を履行しつつ、自分の恋心のために友人を裏切るプロテュース、それに対しての良心の呵責、愛に対して仕える人間の流動性など、プロテュースの矛盾性は明らかである。仮にシルヴィアを愛するという筋が一本貫いているとしても、シルヴィアを森で強姦しようとした直後にヴァレンタインの非難で、急に罪を恥じて心から後悔を表すというのは、納得のいかない急激な変化である。ヴァレンタインがプロテュースの反省の言葉で自分の恋人を捧げると語るのと同じぐらい、プロテュースの急激な反省と後悔も、矛盾ではないだろうか。この急激な友人ヴァレンタインへの反省において、シルヴィアに対しての恋心は消え去っているのだろうか。プロテュースもヴァレンタインと同じように矛盾を示す登場人物と言える。

結論

第 1 節では知性を求めているが、知性に欠けるヴァレンタイン、そして愛に対して不誠実さを示すヴァレンタインを明らかにして、彼が一見すると理想的な人間に見えるが、欠点を持った人間であり、矛盾と不完全性を表す人物である、という事示した。そして第 2 節では、公の義務と感情のはざま、公の義務を果たすプロテュース、そして裏切りの行為を行いつつもそこには良心が見えるなど、一定の評価が与えられるプロテュースを示した。またプロテュースも愛に対して矛盾を示す登場人物であるという事を証明した。二人とも、同じような性格を持っていると言える。

この論文の主題は、ヴァレンタインとプロテュースという二人の登場人物の別々でありながらも一体感を表す性格が劇中でどのような意味を持つのか、を明らかにする事であった。作品タイトルの『ヴェローナの二紳士』という名前も 2 つの性格を挙げながらも 1 つの存在を表している、という事をイントロダクションで示したはずで

ある。この問いに答える事が本稿の主題である。

ヴァレンタインとプロテュースの似たような性格は、人格として共通性を持っていると言え、そして一人の女シルヴィアを共に愛してしまうという点で、二人の一体感は一層強化される。しかし、結果的にヴァレンタインはシルヴィアを妻にし、プロテュースはジュリアを妻にすることでこの劇は幕を閉じる。それぞれの愛の成就是、二人の男が一人の女を愛するという緊張を解消させ、それぞれが愛する妻を持つという共通性を持つようになる。ヴァレンタインとプロテュースの似た性格という共通性と同じ女を愛するという一体感は、二組の愛しあう夫婦という存在が生まれる事によって、別の共通性が生じるのである。

この作品の最後のヴァレンタインの台詞をここで考えてみたいと思う。大公に語りかけるヴァレンタインの言葉である。

Duke What mean by that saying?

Valentine Please you, I'll tell you as we pass along,
That you will wonder what hath fortunèd.
Come, Proteus, 'tis your penance but to hear
The story of your loves discoverèd.
That done, our day of marriage shall be yours,
One feast, one house, one mutual happiness. (5. 4. 165-71)

大公 それはどういう意味なのだ。

ヴァレンタイン それは行きながらお話しします。

そんな事が起きたのかと驚きになるはずです。

さあ、プロテュース、聞いているだけが罪滅ぼしだぞ。

君の恋愛の暴露話をな。

それが終わったら、婚礼の日は同じ日だ。

祝宴も、家も、互いの幸せも一緒だ。

最後のヴァレンタインの台詞により共通性はさらに強化されているのが分かるだろう。この事は J・L・シモンズ(J. L. Simmons)の述べる「友情の理想という余地は、異

性愛の関係と結婚の以前にある一時的な段階にのみ残っている」(“ A space for the idealization of friendship remains only a chronological stage before the heterosexual relationship and marriage ”)(861)という心理学的な友情の概念を取り消し、友情の継続性を表すものである。満たされた二組の夫婦になるという愛を実現させると同時に友情も維持されるのである。

本稿の問いへの答えはもう明らかになったはずである。ヴァレンティンとプロテュースという似たような性格を持つ存在は、一人の女を愛するという状態で、同一性をさらに強化するが、結果的に別々に愛する妻を持つという愛の成就により、別の意味での共通性を持つようになる。作品タイトルの2つの存在を表しながらも1つの存在を表している名前は、愛という共通性の意味でも作品のテーマに合っているのである。これがヴァレンティンとプロテュースの持つ一体感の意味の変化であり、本稿の答えである。

悲劇と喜劇の差はあるが、やはりタイトルで2つの存在を表している『アントニーとクレオパトラ』(*Antony and Cleopatra*, 1623)は、地上での誤解から生じた結ばれない愛が、死によって成し遂げられる様子を描いている。この意味でも2つの存在の1つの性格という特徴を表している⁷。シェイクスピア40の劇の内、タイトルに2つの性格を表している作品がいくつかあるが、それらの共通点や差異を調べてみるのも興味深い研究である。それについては別の論者の評を期待したいと思う。

註

1. 以下、『ヴェローナの二紳士』からの引用は、Oxford World Classics、*The Two Gentlemen of Verona*、2008年の版に拠る。
2. 同じイギリス文学で『ジキル氏とハイド氏の奇妙な事件』(The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde, 1886)は、同一人物の二重人格という似たような現象を扱っている。表と裏として比較対照研究も興味深いと思う。
3. Speed の名前、つまり「速度」を意味するこの単語は召使ながらも知性の鋭さを持っている彼を表現している。主人よりも知性がある証拠としての台詞は沢山あるが、この恋の秘密を見抜く Speed は、より一層知性を感じさせる。
4. コールは友情の馬鹿げた例として「自分の唯一の息子を友人の子供を助けるために犠牲にする男」(“ a man sacrifices his only son to save his friend's child ”)(211)を挙げている。
5. 日本文学においても、友情と恋の葛藤を描いた夏目漱石の『ころも』や武者小路実篤の『友情』などがあるが、いずれも友情よりも恋を選ぶ男の姿を描いている。プロテウスが友情よりも恋を重視するのは、現代の我々の感覚から言っても、ごく自然な反応に思える。
6. 最後の「恋人に対して愛をささげる人間」としての仕える人間は、女性にかしづく男というテーマでの文学や、事件、争いなど枚挙に暇がない。通説で「事件の陰に女あり」などと言われるが、女性とそれにまつわる話の重要性は、決して研究の上でも無視はできない。
7. ここでは『アントニーとクレオパトラ』を二つの存在の一つの性格として扱ったが、もちろんこれとは正反対の分断をタイトルが表している、とも考えることも出来る。同一性と分断の正反対の解釈は、論の展開により可能であり、意味決定の不可能性を提唱する解体批評の格好の材料にもなりうると思われる。

引用・参考文献

- Bergeron, David M. . “ Wherefore Verona in "*The Two Gentlemen of Verona*?" ”
Comparative Drama, Winter 2007-8, Vol. 41, No. 4 (Winter 2007-8),
<https://www.jstor.org/stable/23238703>, pp. 423-38.
- Clayton, Thomas. “ The Climax of "*The Two Gentlemen of Verona*": Text and
Performance at the Swan Theatre, Stratford-upon-Avon, 1991. ” *Shakespeare Bulletin*,
FALL 1991, Vol. 9, No. 4 (FALL 1991), <https://www.jstor.org/stable/26353640>, pp.
17-9.
- Cole, Howard C. . “ The "Full Meaning" of "*The Two Gentlemen of Verona*" .” *Comparative
Drama* , Fall 1989, Vol. 23, No. 3 (Fall 1989), <https://www.jstor.org/stable/41153412>,
pp. 201-27.
- Hopkins, Justin B. . “ *The Two Gentlemen of Verona* by Matt Pfeiffer: *Macbeth* by Patrick
Mulcahy. ” *Shakespeare Bulletin*, Vol. 32, No. 4 (Winter 2014),
<https://www.jstor.org/stable/10.2307/26355076>, pp. 730-9.
- Humphries, Mark. “ Zeno and Gallienus: *Two Gentlemen of Verona*. ” *Classics Ireland* ,
1997, Vol. 4 (1997), <https://www.jstor.org/stable/25528310>, pp. 67-78.
- Hunt, Maurice. “ "*The Two Gentlemen of Verona*" and the Paradox of Salvation. ” : *Rocky
Mountain Review of Language and Literature* , 1982, Vol. 36, No. 1 (1982),
<https://www.jstor.org/stable/1346733>, pp. 5-22.
- Keyishian, Harry. “ The Shakespeare Plays on TV: *Two Gentlemen of Verona*. ”
Shakespeare on Film Newsletter, Vol. 9, No. 1 (December, 1984),
<https://www.jstor.org/stable/44711672>, p. 6.
- Lindenbaum, Peter. “ Education in *The Two Gentlemen of Verona*. ” *Studies in English
Literature, 1500-1900* , Spring, 1975, Vol. 15, No. 2, Elizabethan and Jacobean Drama
(Spring, 1975), <https://www.jstor.org/stable/449669>, pp. 229-44.
- Maurer, Margaret. “ Figure, Place, and the End of "*The Two Gentlemen of Verona*". ”
Style , Fall 1989, Vol. 23, No. 3, Texts and Pretexts in the English Renaissance (Fall
1989), <https://www.jstor.org/stable/42945806>, pp. 405-29.
- — —. “ The Arden Shakespeare "*The Two Gentlemen of Verona*" by William C.

- Carroll. " *Shakespeare Quarterly*, Vol. 56, No. 3 (Autumn, 2005), <https://www.jstor.org/stable/3844085>, pp. 357-9.
- Rivlin, Elizabeth. " Mimetic Service in " *The Two Gentlemen of Verona*". " *ELH*, Spring, 2005, Vol. 72, No. 1 (Spring, 2005), <https://www.jstor.org/stable/30029964>, pp. 105-28.
- Rosky, William. " " *The Two Gentlemen of Verona*" as Burlesque. " *English Literary Renaissance*, SPRING 1982, Vol. 12, No. 2 (SPRING 1982), <https://www.jstor.org/stable/43447076>, pp. 210-9.
- Shakespeare, William. *The Two Gentlemen of Verona*. Ed. Roger Warren, Oxford UP, 2008.
- Simmons, J. L. . " Coming Out in Shakespeare's *The Two Gentlemen of Verona*. " *ELH*, Winter, 1993, Vol. 60, No. 4 (Winter, 1993), <https://www.jstor.org/stable/2873320>, pp. 857-77.